

# 超 音 波 検 診

## 動 向

腹部超音波検査は、腹部の肝臓、胆嚢、腎臓、膵臓、脾臓における疾病の早期発見に役立つばかりでなく、これらの臓器以外にも、大動脈、膀胱などの臓器を観察することができ、多様な所見内容で疾患を発見できる検査である。

本検査の特徴は、放射線被曝がなく任意の断層面が観察出来るだけでなく、短時間で容易に行え検査に伴う苦痛がない点であり、安全かつ有用な検査として定着し近年、生活習慣病予防健診の付加項目として受診するケースも多く見られる。

産業保健分野における受診者数は、表1に示したとおりである。平成18年度は受診者数において前年度比556名増の10,576名となった。

受託団体はその殆んどが毎年の依頼であるが、検査の必要性が理解され新規受託も順調に推移し、6年連続しての受診者数の増加となった。

当協会では熟練した専門医の知識と経験をもとに生活習慣病予防健診などとの併用や有所見者の精密検査の実施と、治療の出来る医療機関との連携によるフォローアップを行っている。

## 方 法

腹部超音波検査は可聴域外の音波(3～4 MHz)を対外より体内に発射しその反射を画像化することにより得られる情報で診断する装置である。この検査は腹部の実質臓器(肝臓、膵臓、脾臓、腎臓)、胆嚢、腹部大動脈、さらにはリンパ節、膀胱、前立腺、腸管等腹腔内の様々な臓器の状態を把握することが可能である。検診では実質臓器と胆嚢及び腹部大動脈を検査の対象としている。

### A. 検査前の注意

- ①前夜9時以降の飲食をせずに午前中に検査する。
- ②午後に検査を行う場合には胆嚢が収縮することを考慮して牛乳、卵、油ものを避けて通常の半量の朝食を摂ってもらい検査まで6時間の絶食とする。
- ③消化管のバリウム検査は数日前から実施しない。
- ④胃X線や内視鏡を同日に試行する場合には臓器の描出状態を考えて超音波検査を先に行う。

当施設では検査に先立って下剤等の薬物投与ならびに浣腸等の前処置は行っていない。

### B. 検査の実際

- ①受診者は背臥位で腹部を露出し、検査者は受診者の右側の装置に向かって座る。
- ②腹部全体にゲルを広く塗布し、探触子を受診者の皮膚に密着させ腹部の臓器を観察しながら記録する。

## C. 判 定

技師により画像をすばやく適切に判断すると同時にフィルムを撮影し専門医とディスカッションしながらダブルチェックで最終判定を下している。尚判定に際しては、前回受診歴を確認し前回所見並びに精検所見などを考慮して判定を下している。

## 結 果、考 察

平成18年度は前年に比べ男女とも受診者数の増加を見た(表1)。厳しい社会情勢の中、経年受診者が多く当施設の超音波検診の高い評価が窺える。

判定内訳を見ると要医療となる要精密検査群、要受診群、主治医継続群は全体で7.3%であり昨年度よりも若干の低下を認めそれ以外の何らかの所見を有する群は全体の68.4%とこちらも昨年度に比べ若干の低下を認めた(表2)。

臓器別所見内訳をみると胆嚢ポリープ、脂肪肝、大動脈石灰化といったいわゆる“生活習慣病”に関連する頻度が高く、悪性腫瘍との鑑別が必要な胆嚢線筋腫症、1 cm以上の胆嚢ポリープ、肝血管腫を含む肝腫瘍、膵のう胞、膵管拡張、腎腫瘍といった症例の拾い上げ、悪性腫瘍ではないものの場合によっては治療が必要な胆石、胆泥、肝繊維症、膵石灰化、水腎症といった症例の拾い上げは例年どおり行った。病的意義の不明な胆のう胞、腎のう胞、肝内石灰化、副脾といった所見も例年通り拾い上げた(表3、表4)。

現在当施設では試行錯誤しながらこれらの 1)生活習慣病関連の症例群、2)悪性腫瘍との鑑別を要する要精査群、3)悪性腫瘍以外の要精査群、4)現時点では病的意義の無い経過観察群に分類し各事業所の要望に可能な限り応対し最新医療事情を考慮した検診処理を行っている。

最近検診に対する認識が変革し本来なら高次の医療機関において診療されるべき膵管気腫症、膵切除後症、肝腫瘍症例等が受診者内に散見されその対応の幅に柔軟性が求められている。実際年に数件は緊急対応が必要な症例がある。協会では熟練した超音波指導医のもと超音波所見の判定処理を行い変革する様々な事態に備えて日々研鑽努力し、よりニーズに合った検診を目指している。

尚、今年度も昨年度の3名に加え4名の超音波検査技師試験の合格者を輩出した。今後も厳しい現実の中、さらなる進歩を目指したい。

関係の集計表は78頁に掲載